

KDLスタッフが選ぶ！ 今月のおすすめ資料

2025 April

「移民大国」日本

日本には、在日コリアンをはじめとする旧植民地出身者から、1980年代後半以降に大規模に受け入れが始まった出稼ぎ労働者や留学生に至るまで、多くの在留外国人が暮らしています。その歴史と規模を考えると、日本はむしろ移民大国だと言えます。

「移民」という問題が最近になって急に現れたと感じる人もいるかもしれませんが、実際には私たちは常に同じ社会の一員として共に生きています。日本という国は、先祖代々住み続けてきた人々だけでなく、多様なルーツを持ち移り住んだ人々、短期間滞在した人々、そして外部から影響を与えた人々とともに築かれてきました。

おすすめ資料

ふたつの日本
「移民国家」の建前と現実
望月優大

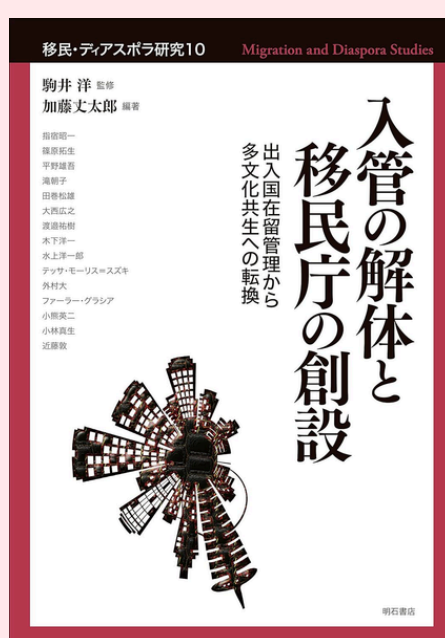
大きく変わる
「国のかたち」
その全体像をつかむ



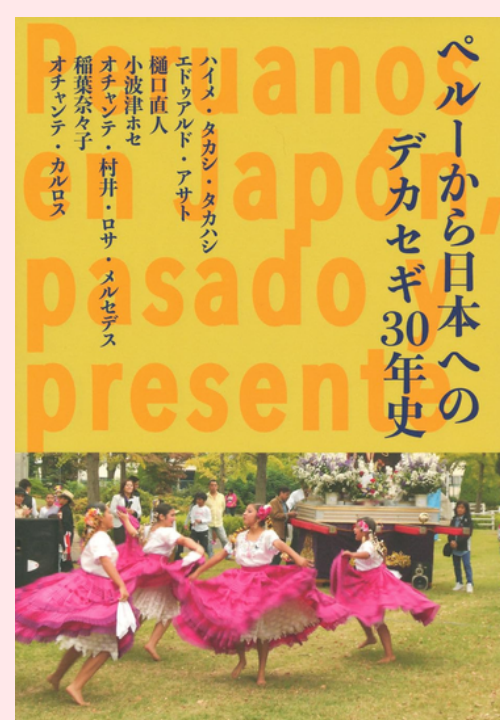
経済、民族、そして人権という三つの力学のうち、日本政府がこれまでどのように経済的論理を優先しつつ、血縁主義を暗黙のうちに推進しながら移民政策を策定し、選別的に移民を受け入れてきたのかについて、数字や具体的な事例を示しながら解説する一冊です。



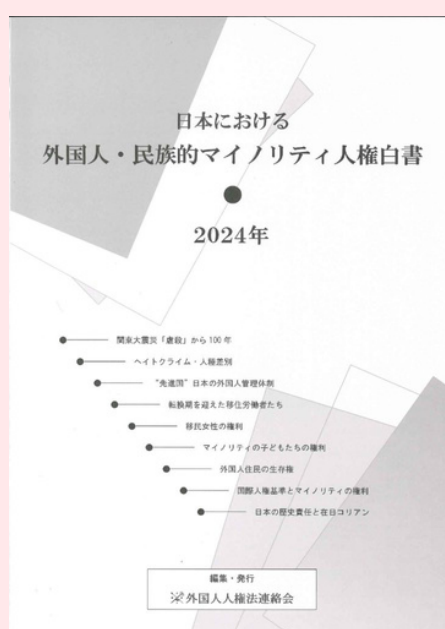
本当の意味での「多様」な社会とは。この社会でいないとされがちな人々の声に耳を傾けてみませんか。本書籍では、素敵なイラストとともに4人の生きた道のりや気持ちが描かれており、入管法による息苦しさを抱えた人々や現在の法律について学ぶことができます。



日本に流入した移民・ディアスポラは日本社会における重要な構成員であることはご存じでしょうか。そんな彼らが苦しむ入管庁での人権侵害や入管内部の実態、また、諸外国の移民庁の成り立ちや日本の移民政策における組織構造の問題点を学ぶことができます。



19世紀後半から20世紀にかけて、日本の人口増加や経済的困難を背景に、政府の奨励で多くの日本人が南米へ移住しました。1980年代以降、南米日系人は日本の好景気による人手不足を契機に日本へ「戻り」ました。この本は、特にペルー日系人のデカセギ生活の実像を描き出します。



本書は、外国人や民族的マイノリティに関する事柄を包括的に取り上げています。入管法改正の影響や移民労働者の実態について、ジャーナリストや研究者が深く掘り下げ、共生社会実現に向けた課題や問題点を明らかにします。



貧乏な家族を支えるために、「技能実習生」として発展途上国から日本にやってきた一人の女性の物語を描いています。彼女が日本の職場で不当な扱いを受け苦しみ、それと同時に「技能実習生」の闇が暴かれていくブラックコメディ作品となっています。